

KCE

Kawaguchi Chamber Ensemble

川口室内合奏団

第2回演奏会

2018年

11月24日(土)

13:30 開場

14:00 開演

リリア

音楽ホール

Program

J. S. Bach 無伴奏ヴァイオリンソナタ第3番より (Solo 藤本舎里)

J. S. Bach Vn と Ob のための協奏曲 (Vn 藤本舎里、Ob 山口尊実)

J. S. Bach 管弦楽組曲第2番 (Solo 門傳美智子)

<休憩>

F. J. Haydn 交響曲第2番、第37番

W. A. Mozart 交響曲第4番、第5番

ご挨拶

団長 山口尊実

本日は川口室内合奏団第2回演奏会にご来場下さりましてありがとうございます。おかげさまで本日第二回演奏会を開催することができました。ありがとうございます。

さて、今回は、「2」にちなんだ曲をメインにプログラムを組みました。前半は、バッハのヴァイオリンとオーボエのための二重協奏曲、そして管弦楽組曲第2番をお楽しみ下さい。後半は、ハイドンの交響曲第2番とモーツァルトの交響曲第4番を演奏いたします。

なぜモーツァルトの交響曲は2番ではないのか？ 第2番は、おそらく父のレオポルド・モーツァルトの作で、第3番はカール・フリードリヒ・アーベル作なのです。ということで、ヴォルフガング・アマデウス作の実質2番である4番にいたしました。

ただ、これだけだと寂しいので、ハイドンがおそらく同じ時期に書いた第37番、そして、モーツァルトは第5番を演奏して、当時の世界に近づくことができればと思います。もちろん、オープニングにバッハのヴァイオリンのソロももちろんございます。バロックから古典初期への世界をうまく表現することができ、皆様にお楽しみ頂けたら幸いです。

ヨハン・セバスチャン・バッハ(Johan Sebastian Bach, 1685- 1750)

・無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ第3番よりラルゴ

バッハの無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ BWV1001-1006 は、奇数番号のソナタ3曲と偶数番号のパルティータ3曲で構成されている。3曲のソナタは、緩一急一緩一急の典型的な教会ソナタの形式をとっており、第2楽章には長大なフーガを置いている。一方パルティータは、第1番および第2番は典型的な4楽章形式をとっており、第3番は管弦楽組曲を思わせる構成となっている。

このソナタとパルティータは、1720年に作曲された。バッハは、この年の6月、最愛の妻バルバラを突然の病いで失い、信仰が与えてくれる精神的な支えを必要とし、ますます信仰深くなっていき、教会音楽によって自分の奥深い信仰を表現したいとより思うようになった。

第3番のソナタとパルティータは、唯一全部長調で書かれている。特にこの第3番のソナタは、自然回帰を表す C-dur であり、今日演奏するラルゴは、その下属調で希望の象徴とされている F-dur である。このラルゴは、優美で希望に満ちた旋律をもつ。また、自分で自分の伴奏をしていて、二人で弾いてるようにきこえる。

ちなみに、翌年12月、20歳のソプラノ歌手、アンナ・マグダレーナと結婚し、幸せな新しい家庭を築いた。



・ヴァイオリンとオーボエのための協奏曲ニ短調 BWV1060

この曲は、原譜が現存しておらず、2台のチェンバロに書き換えられたものから復元された。ハ短調（♭3つ）とニ短調（♭1つ）と2種類あり、今回はニ短調のほうを。1736年頃、バッハがケーテンで活躍していた時代に名オーボエ奏者と出会い、作曲されたと考えられている。

第1楽章 アレグロ リトルネッロ形式



冒頭に tutti（トゥッティ：全体合奏）で主題が出てきて、その主題を独奏楽器（オーボエとヴァイオリン）が受けていく。最後に主題が再現して楽章が終わる。

第2楽章 アダージョ



伴奏を弦のピツィカートで演奏することも多いようだが、今回は arco で。独奏楽器は優美なカウンタービレを演奏。対位的な展開や2つの独奏楽器の対話がよい。不完全休止で終楽章へ続く。

第3楽章 アレグロ リトルネッコ形式



一楽章同様、冒頭に主題が tutti で出てきて、独奏へと繋がり、盛り上がっていく。Vnの技術も見所の一つ。最後に主題が再現して tutti で終わる。

※リトルネッコ形式

イタリア語の ritorno (復帰。動詞は ritornare) から派生した言葉で「小さな反復」の味。バロック時代の協奏曲に多く見られた形式で、反復回帰する部分(リトルネロ)をもち、ソロと合奏が交代しながら進んでいく形式。A B A C A D…A という形式。 Rond 形式と似ているが、リトルネロは最初と最後を除き、主調以外の調で奏される。

1600年頃から、有節アリアの前、間、後などに奏される器楽曲を指すようになった。

1700年頃から協奏曲にこのリトルネッコ技法が使われるようになった。独奏者のためのエピソード部分と、トゥッティ(全合奏)によるリトルネッコの交代が繰り返される。バロック協奏曲の急→緩→急の急楽章(第1楽章と第3楽章)は、リトルネッコで始まりリトルネッコで終わる。

バッハ教会とバッハ全集

1850年、ヨハン・ゼバスティアン・バッハの全作品を刊行することを目的に、バッハ協会(Bach-Gesellschaft)が組織された。1851年から1899年にかけて、46巻59冊が刊行。バッハ協会は全集の刊行終了とともに解散した。(1926年にフーガの技法(BWV 1080)を補巻として刊行)翌1900年に新バッハ協会(Neue Bach-Gesellschaft)設立。その後の新たな原典の発見や、様々な研究、分析などによって、新バッハ協会は、バッハの没後200年に当たる1950年に、新たな全集刊行を決定した。1951年に「ヨハン・ゼバスティアン・バッハ研究所(Johann-Sebastian-Bach-Institut Göttingen)」を設立し、編纂作業を開始。1953年にはライプツィヒの「バッハ・アルヒーフ(Bach-Archiv Leipzig)」が共同編纂機関として加わり、カッセルのベーレンライター社(Bärenreiter-Verlag)とライプツィヒのドイツ音楽出版人民公社(VEB Deutscher Verlag für Musik)が出版を担当した。1954年に刊行が始まり、当初の予定を超えて刊行が続けられ、2008年にひとまず完了。2010年には総索引も刊行され、実質的には刊行は終了した。

・管弦楽組曲第二番 BWV1067

序曲



「管弦楽組曲」(Orchestral Suit) という名をバッハは使っておらず、単に、「序曲」(Ouverture) としていた。新バッハ全集では「4つの序曲(管弦楽組曲)」としている。冒頭は四拍子だが、最後に戻ってきたときには三拍子になっているのが何気に楽しい。

スコアにもあるように、現在ではソロ楽器はフルートであり、それが当然のような感があるが(本日もフルートによる演奏であるが)、実は、オーボエパートから直されたことが分かっている。オーボエによる演奏を聴いたことはないが、フルートの方がいいような気がするの私だけだろうか。(定着していることを考えると…。)

ロンドー (仏: rondeau、複数形: rondeaux)



アウフタクトから始まる4分の2拍子(アラブレーベ)となっている。ロンドーは、もともとは13世紀から15世紀のフランスの2つの押韻をもつ15行詩に基づいて作られた楽式である。詩形の押韻構成に従う韻文とリフレインの繰り返しのパターンで構成され、一般的な形式は「ABaAabAB」である。初期のロンドーは長い物語詩の中に挿入されたものだが、バロック時代になると、簡単なリフレイン形式のダンスの楽章に使われた。

サラバンド (フランス語: sarabande、イタリア語: sarabanda サラバンダ)



アウフタクトから始まる3拍子の荘重な舞曲である。付点四分音符と八分音符を組み合わせたリズムが多用されることが特徴的である。これは、ダンスにおいて引きずるようなステップに対応するものであると言われている。17世紀初期には荒々しく急速だったが、後に遅く荘重なものになった。グリーグの『ホルベアの時代から』、サティの『3つのサラバンド』、ドビュッシーの『ピアノのために』が有名。

ブレーまたはブレ、ブーレ (bourrée)



オーヴェルニュとビスカヤに共通する17世紀の舞曲。速いテンポの2拍子の舞曲。

ポロネーズ (仏: polonaise、波: polonez、伊: polacca)



フランス語で「ポーランド風」の意であり、マズルカと並んでポーランド起源の舞曲である。初めて聞いたとき、八分音符でとってしまい、拍子感が分からなかったのだが（私だけ？）、楽譜を見て分かるように、ゆっくりとした4分の3拍子である。

3拍子の第1拍に符点のリズムがくるのが特徴である。（初期のものは必ずしもそうではなく、2拍子のものもあり、現在のリズムが定着したのは古典派の時代である。）ダンスは三拍目の最後に挨拶をして締めくくられるため、その弱拍で終結する。（「女性終止」）

ドゥーブル (仏) ダブル (英) (Double)



変奏。ポロネーズをチェロが奏で、フルートがその変奏を演奏する。低音部のメロディに耳を傾げるか、高音部の変奏に耳を傾げるか、同時に二つのフレーズを聴くか、それはあなた次第。（リピートするので、1度めと2度めで聴き方を変えても面白いかも。）

メヌエット (独: Menuett、伊: minuetto、英: minuet、仏: menuet)



ヨーロッパの舞曲のひとつ。4分の3拍子で、2小節が1つの単位となってフレーズが構成されている。フランスの民俗舞踊に由来する。ビゼー作曲「アルルの女」のメヌエットは有名だが、特に第二組曲のほう（フルートソロ）はみなさんご存じだろう。

メヌエットは、のちに、ハイドンやベートーヴェンによってスケルツォとなっていく。

バディネリ (badinerie)



フランス語の動詞「バディネ badiner」（冗談を言う、ふざける）から作られた女性名詞。男性名詞の「バディナージュ badinage」が使われることもある。バディヌリーないしはバディナージュは、18世紀になり、フランスやドイツの作曲家によって組曲の楽章に採用された。ここでは、バッハは、縮めの余興としている。初めて楽譜を見たときには、「この曲はアウフタクトで始まるのか！」と思ったものだ。これはバッハの冗談なのか？あるいはアウフタクトで始まるように演奏せねばならないのか？どちらがお好みですか？

フランツ・ヨーゼフ・ハイドン (Franz Joseph Haydn, 1732- 1809)

・ Sinfonia No.2 C-dur 交響曲第2番 ハ長調

のモルツィン伯爵家時代の模索の時期。まだはっきりとしたソナタ形式は確立されていないが、性格の異なる二つの主題や転調など、ソナタ形式の息吹が感じられる。

第一楽章 Allegro C-dur アレグロ ハ長調 二分の二拍子 (アラブレーベ)



よくよく見れば（逆におおざっぱに見れば？）ただのハ長調の音階ではないですか！しかしながら（それゆえ？）、冒頭からハイドンの世界に引き込まれていってしまう。この主題の後、対照的な性格の主題が現れ、途中ト長調に転調し、

第二楽章 Andante G-dur アンダンテ ト長調 四分の二拍子 (弦楽合奏)



ここではヴァイオリンとヴィオラの楽譜をば。ハイドンならではの弦楽合奏。まずはメロディを、次に低音を、と聞いていくと、あることに気づくでしょう。1stVnと2ndVnはユニゾン。VaとVc&CBもオクターブユニゾン。シンプルだけど美しい。流れるように進行し、転調し、最後に戻って終了。対向配置ならではの面の広がりを楽しんで下さい。

第三楽章 Presto C-dur プレスト ハ長調 八分の三拍子



曲の構成が何かに似ている。同じフレーズが何度も出てくる。そう、前半バッハのドッペルコンチェルトに出てきたリトルネッロ形式と似ている。A-B-A-C-A-……-A-C-A-B-A。そうこれがロンド形式。管弦楽組曲第二番のロンドーに似ていなくもないが、これがロンド形式。慣れてくると、冒頭の主題がくるとほっと一安心するようになる。（かな？）

・ Sinfonia No.37 C-dur 交響曲第37番 ハ長調

交響曲第2番と同じハ長調。時代的にはこちらのほうが先なのではという節もある。トランペットとティンパニが含まれる版もあるのだが、第2番と同時期の作品なので、当初はなしで演奏していただろうということで、「原典版」で演奏します。

第一楽章 Presto C-dur プレスト ハ長調 四分の二拍子



第2番の1楽章は上昇していったが、こちらはドレミファソファミレドと5度上がって下がっていく。合唱の発声練習のようだが、そこにリズムがついて、1stVnの小気味いいシンコーションに乗って進行していく。

第二楽章 Menuetto C-dur メヌエット ハ長調 四分の三拍子



1楽章に引き続きハ長調で、3拍子のメヌエット。そしてトリオへと続く。

トリオ



ハ長調→ハ短調という同主調（同名調）に転調し、冒頭に戻って終了。

第三楽章 Andante c-moll ハ短調 四分の二拍子（弦楽合奏）



再びハイドン得意の弦楽合奏。一瞬2番と同じ2声部なのかと思いきや、微妙に異なるところがある。詳細はスコアで確認していただくとして、なんとなく雰囲気違う場所が幾度となく出てくるでしょう。

第四楽章 Presto C-dur プレスト ハ長調 八分の三拍子



2番同様8分の3拍子で快活に進んでいく。

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

(Wolfgang Amadeus Mozart 1756-1791 年)

モーツァルトは 1763 年から 1766 年、7 歳～ 10 歳の時パリ、ロンドンへ行き、この時期に交響曲第 4 番、第 5 番を書いた。その前年の 1762 年、6 歳の時、9 月にウィーンへ旅行し、10 月 13 日、シェーンブルン宮殿でマリア・テレジアの御前で演奏した際、宮殿の床で滑って転んでしまい、モーツァルトは、その時手を取った 7 歳の皇女マリア・アントニア (後のマリー・アントワネット) に「大きくなったら僕のお嫁さんにしてあげる」と言ったという話は知る人ぞ知る有名な逸話である。

・ Sinfonie in D KV19 交響曲ニ長調

前述のように、一般的には第 4 番となっているが、実質的には第 2 番の交響曲である。この曲は、1765-66 に書かれ、三楽章構成である。ハイドンの交響曲と比べるとシンプルな感じはするが、随所にモーツァルトらしい難しさがある。

第一楽章 Allegro D-dur アレグロ ニ長調 四分の四拍子



快活なリズムと強弱のコントラストで始まり、その後すぐに上昇音型によって曲が進んでいく。想定外の和音がでてきてドキッとしますが (何気に私はそこが好きなのですが)、後半の再現ではそのようなこともなく自然に終わります。この楽章はリピートがないので (ベーレンライター版)、一度しか味わえません。(なぜリピートがついている版が出たのか? 短いから、と出版社が勝手に入れた?)

第二楽章 Andante D-dur アンダンテ ト長調 四分の二拍子



ニ長調 (D-dur) の属調でイ長調 (A-dur) に行くかと思いきや (ハイドンの 2 番の 1 楽章と 2 楽章参照)、下屬調のト長調 (G-dur)。アンダンテの名のとおり、のんびりし過ぎず、進んでいく感じが三連符とともに感じられる。効果的なホルンの使い方もうまい。

第三楽章 Presto D-dur プレスト ニ長調 八分の三拍子



ニ長調に戻り、軽快な八分の三拍子。4 小節単位なので、一瞬 4 拍子のようにも思えてしまう。強弱のコントラスト、テーマの受け渡し、ユニゾン、楽しいスピード感に満ちた曲。

・ Sinfonie in B KV22 交響曲変ロ長調

第一楽章 Allegro B-dur アレグロ 変ロ長調 四分の四拍子



この曲も f と p のコントラストで始まる軽快な曲。旧版では冒頭が f p になっているのだが、ベーレンライター版では、2小節めから p になる。これは、1小節の4拍め（2小節目のアウフタクト）までが f で、2小節に入った瞬間に p にするという高度な技術を要求される。（と言った難しさ故に誰かが勝手に冒頭から f p にしてしまったのだろうか。）

その後、1st ヴァイオリンと 2nd ヴァイオリンが交互にメロディを奏でる部分は対向配置ならではの楽しみが味わえる。（もっと大人数の楽団で、かつ、客席中央に座っていないとよく分からないですね。指揮者にはよくわかります！）

第二楽章 Andante g-moll アンダンテ ト短調 四分の二拍子



調号が同じで短調、平行調で始まる。この曲も、8小節2拍め裏（9小節目アウフタクト）から subito f になり、強弱のコントラストを効果的に使っている。中間部で長調になり、再び短調になって終わる。

第三楽章 Molto allegro B-dur モルトアレグロ 変ロ長調 八分の三拍子



冒頭から f で始まる軽快な曲。冒頭の部分が繰り返され、ロンドのようにも聞こえる。この歳でハイドンの2番との類似点が?!というのは考えすぎか。

Vn solo & コン・ミス 藤本舎里

3歳より才能教育研究会にてヴァイオリンをはじめ。東京藝術大学を経て、同大学院修了。全日本学生音楽コンクール大阪大会小学校の部及び高校の部第2位。五十嵐由起子、澤和樹、景山誠治、故ゲルハルト・ボッセ各氏に師事。川口市芸術奨励賞受賞。アマチュアオーケストラとの協奏曲共演の他、国内オーケストラや室内楽、ソロなど様々な分野で活動。後進の指導にもあたっている。奈良県出身、川口市在住。

フルート 門傳美智子

武蔵野音楽大学音楽学部フルート専攻卒業。フルートを長谷川博、甲斐道雄、ローラント・コヴァーチの各氏に師事。フルートデビューリサイタル、埼玉県新人演奏会、ほか多数出演。スイスで行われたジェームス・ゴールウェイフルートセミナーに参加。現在、ソロ、アンサンブルで演奏活動を行っている。アザレア・フルート・アンサンブルメンバー、さいたま市音楽協会理事。

指揮・オーボエ 山口尊実

埼玉大学教養学部教養学科卒業。幼少よりピアノを始め、小学生でトランペットを始める。中学の管弦楽部でオーボエに出会い、以後オーボエを続ける。宮本文昭、シェレンベルガー、茂木大輔、ルルー各氏らの演奏会や公開レッスンに足繁く通う傍ら、斎藤享久、渡辺克也、荒絵理子各氏らに師事。楽器：Ob:LF、EH:Bulgheroni
趣味：S660、virago1100、Mono-ski、ScubaDiving (Resuce Diver)、筋トレ、バドミントン etc.

member 敬称略

vn 1st	藤本舎里、渡邊はな、久保山有造	Fl	門傳美智子
2nd	栗田愛子、西野美和	ob	大倉淳、大山明子、山口尊実
va	高橋良暢	hr	林義昭、松沢宗一郎
vc	大和伸明		
cb	菊池昌志		

◎団員募集しております。詳細はHPにて！

次回演奏会のお知らせ

2019年5月5日(日) 14:00 開演 リリア 音楽ホール

曲目

J. S. Bach 無伴奏ヴァイオリンパルティータ第1番より

T. Albinoni オーボエ協奏曲ニ短調作品9-2

J. S. Bach 管弦楽組曲第3番

F. J. Haydn 交響曲第18番、3番

W. A. Mozart 交響曲へ長調

KCE 川口室内合奏団

Kawaguchi Chamber Ensemble

HP: <http://kce.saitama.jp>

(「kce.saitama」で検索！)

mail: bur@kce.saitama.jp